

垣間見たインドネシア

平成 20 年(2008)5 月 10 日

仲津 英治

「地球に謙虚に」運動代表

<http://www.jttk.zaq.ne.jp/bachw308/index.html>

1. はじめに

去る 3 月お彼岸の頃、仕事の関係で長男夫婦がインドネシアに在住しているところ、孫娘二人を見たさに家族で 5 泊 6 日の小旅行をして来ました。観光旅行ではありますが、初めての国であり、環境、食料、エネルギー問題などで印象深いところがありましたのでレポートさせていただきます。

2. インドネシアという国

インドネシアの面積は、189 万 km² で日本の約 5 倍もあり、人口も 2 億 2200 万人（外務省情報 2006）と世界第 4 位の人口大国です。赤道を挟んで両半球にまたがり、東西にも長い国です。18,000 もの島々で構成されていますが、人口の半分以上がジャワ島（12.7 万平方キロメートル）に住んでいます。ジャワ島は日本の本州の半分強の大きさですから、大変な人口過密状態です。実際ジャワ島の東に位置するリゾート地バリ島（ジャワ島に近く人口も多い）から入ったのですが、空港玄関に出た瞬間から同じような制服を来た人たちが、仕事をしている雰囲気でもなく固まって話しなどをしており、「いやあ一人の多い国だな」と第一印象を持ちました。長男の話では、インドネシアは、助け合いの社会であり、低賃金で多くの人を雇っているとのことでした。空港で荷物を勝手に運ばれ、チップを要求されましたが、各所でこの光景を見かけました。それで世の中が回っているのでしょうか。人々は温和です。

3. 曲がりくねった川と水田

今回の旅行は、既成観光旅行のメニューの中で自由日に長男宅を訪問することにしました。

バリ島から飛行機でジャワ島の古都ジョグジャカルタに参りました。飛行機の窓際から

地形を見るのが好きな私は、二つの発見をしました。川が蛇行しており、水が茶色っぽく濁っているのです。しかし緑は豊かでした。

殆ど自然に任せた生活を送ってきたインドネシア人（インドネシアは多民族国家でインドネシア人と一括でくくれないようですが）は、恐らく河川改修のような治山治水工事を行なって来なかったのでしょうか。直線状の川は見かけず、ましてや 500 キロほどの移動距離の間、ダムも見ませんでした。過去におそらく大雨による自然災害は多々あり、多くの犠牲者も出したことがあったと思われませんが、それを従容として受け入れてきたのでしょうか。但し台風はありません。赤茶けた流れは、熱帯の日差し等により堆積物の分解が速過ぎ、土壌があまり蓄積されないことから、表土が雨で河川に流れ込むためだそうです。長男の話では屋根瓦のレンガ色と一緒とのこと、赤土を焼いて瓦、レンガなどにしてきたようです。緑が豊かと申し上げましたが、パーム油を取るため植林したアブラヤシが多いからでもあること。パーム油は最近日本でも消費が急増しつつあります。

もう一つの発見は、水田でした。ジョグジャカルタに近づくに連れ、高度を下げたガルーダ航空機からは、耕地整理された水田が沢山見えて来ました。自然はかなり残されているようで、ニュージーランドのような幾何学模様の森は全くと言って良いほど見掛けませんでした。土色の田んぼと光っている水田が見えてきます。丁度 3 月はお米の収穫期でもあり、田植えの季節でもあったのです。二期作は最低可能のようです。



写真1 ジョグジャカルタ付近の水田

4. 田園風景と街路風景

ジョグジャカルタ空港から旅行社手配のワゴン車と長男の車（運転手付き）で観光地巡りをしました。このときの田園風景と街路風景が印象に残っています。まず田園風景として飛行機から見えた耕地整理された水田では、かなり耕作機械を使っていると想像していたのですが、稲刈りも田植えも全て人力でした。中部ジャワ州スマラン市に1年間生活した長男も、農業機械を使っているのは見たことが無いとのことでした。これなら石油が無くてもお米だけでもこの国は自給できるなと思いきや、10年前にインドネシアは食糧危機に陥っているのです。エルニーニョ現象による旱魃と1998年頃からのインフレにより輸入生産機材が高騰して、食料生産が低下したからです。日本からお米50万トンの緊急援助が行なわれています。また水田を日本向け海老養殖場に変えてしまったところが多く、それも一因とか。

また、道路を走っておりまして、果樹園をあまり見かけませんでした。長男が言うには例外的に、カカオやコーヒーの農園は見たことがある（おそらくオランダ植民地時代のプランテーションの名残）とのこと、市場に溢れている豊富な果物は自然樹木に生るのが多いとのこと。熱帯の豊かさでしょうか。今後食料危機が来てもこの国の人々は、自然の持つ生産力で凌ぐのではないかと想像したしだいです。

さて街路風景です。両側には人家が多く、殆ど街が連なっている印象を持ちました。人口の多いジャワ島だけの光景かもしれません。長男一家が住むスマラン(人口120万、インドネシアで4位の都市、ジョグジャカルタから車で3時間半ほど掛かりました)に往復したときも一部山岳地帯で人家が途切れただけです。そして車の多さです。殆ど日本車で、またモーターバイクも相当な数です。一台14・5万円もするバイクは、インドネシア人には高価ですが、便利さを求めてローンを組んでまで買う若者が多いようです。燃費が四輪車の5倍以上も良いのですから、四輪車は無理でもバイクなら買う人が多いからでしょう。台湾でもバイクの洪水を見ておりましたので、納得が行きました。しかしこの自動車等の増加は石油の消費量が増大することを意味します。実際インドネシアは原油輸出国だったのですが、2004年頃から原油輸入国に変わってしまい、原油価格高騰に対応するため、今や原子力発電所を建設中です。カリマンタン島（旧ボルネオ）等で採掘される天然ガスは豊富で日本などに輸出されていますが。石油スタンドは全て国営の一社経営で、ガソリンの値段は日本円換算で50-60円/Lだったのでしょうか。インドネシアの物価水準からすると安く

ありません。



写真 2 道路に多いモーターバイク

中国、インドだけではなく、世界第 4 位の人口大国インドネシアも原油輸入国になってしまっている事実から、それらがもたらす地球環境への影響と日本にも与える経済的影響を我々は知り、手を打つべきだと思いました。

街路の一つ中華街。インドネシアの街と道路の表記類に基本はアルファベットでした。そしてチャイナ・タウンに付き物の漢字の看板があまりなかったのです。インドネシアでは漢字の使用は長く禁止されて来たとのこと。今緩和されつつあるとのことですが、商才にたけた華人は、人口割合が数%でもインドネシアの経済の実権を握っており、今までインドネシア人との間で軋轢が何度かありました。今まで目にしたチャイナ・タウンとは違う光景です。相当の歴史がありそうです。

5. インドネシアの風土

次いでインドネシアの気候と河川そして地形などに触れて見たいと思います。風土が人

を作るといいます。

見事に乾季と雨季に分かれています。ガイドブックでバリ島のデータを見ましょう。乾季は、4-9月、気温は29-34℃と23-24℃の間、雨量は月間25-100ミリとなっています。乾季ともなれば地面にひび割れが入るくらいカラカラに乾くとのこと。長男夫婦の話では空気が乾いており蒸さないで、日本の都会の夏より凌ぎやすいとのこと。一方雨季は10-3月で気温は33-34℃と23-24℃位の間で雨量は月間100-300ミリ。曇天が続くので洗濯物が乾かないときもあるとか。雨の降り方はスコールで、傘が壊れるくらいなので、傘を持たず、じっと雨が上がるのを待つ人も多いようです。我々も雨季の最後に旅行したことになり、数度激しい雷雨に出会いましたが、上がるのを待っていました。

乾季でも日射により水分の蒸発が激しいので、高山の山頂が望めるのは、大体午前中だけのようです。実際ジョグジャカルタのホテルから見えた富士山に似たムラピ山(2911m)は、午後には山頂が見えなくなりました。綺麗に透き通った川は1回見たきりです。ムラピ山の原流に近いところで、高山からの湧水が源流なのでしょうか。しかし赤茶けた川の水でも子供たちは泳いでいました。下水はあまり整備されていないようで、家庭污水がそのまま海へ流れ込んでいるところが多いようです。スマランも海に面した都市ですが、海水浴はしないそうです。そして雨量は日本より多いのですが水不足になるようで、建物の屋上に貯水タンクを見かけました、台湾に類似して、雪による天然ダムが無いので水不足になるのでしょうか。しかしジャングルも天然ダムです。大切にしたいものです。

ジョグジャカルタから近郊の二つの遺跡を見ました。一つは、世界遺産ボロブドゥール遺跡(824年建立の仏教遺跡)、もう一つはヒンドゥー教遺跡で世界遺産プランバナン寺院(856年建立 石造)です。全部加工石を積み上げた遺跡で、共通するのは前述のムラピ山の噴火により埋没したとの話です(ガイドの案内)。いずれも1000年前後の間、火山灰とジャングルの中に眠っていたと言います。日本へ帰国後不思議に思ったのは、日本も火山国で、同様の事例があってもおかしくないなということです。しかし日本では火山の噴火なり地震によって大規模な町なり人工物が埋もれ、それが人々から忘れ去られ、近世になって再発見された例は私の知る限り無いのです。日本人は火山噴火、地震によって完璧なまでに町などが破壊されても、割と早期に復興に取り掛かったからなのでしょうか。民族性の違いかなと勝手に想像しています。



写真3 世界遺産ボロブドゥール遺跡



写真4 世界遺産プランバナン寺院



写真5 ムラピ山（活火山）

6. 宗教

大きな新しいイスラム寺院も印象に残っています。インドネシアの宗教構成割合はイスラム教が 87.1%です（日本外務省、5 大宗教を許容）。スマランで大きなイスラム教のモスクを見学させて頂きました。出入り OK、写真撮影 OK という緩やかさでした。寺院のドームの最奥にはアラビア語のコーランの一節が刻まれた屏風のような置物がありました。その前まで行ってお参りを致しました。宗教が違っても神聖なる対象に敬意を表することは大事なことだと思います。信者は堂内に入るとき水道で足を清め、素足で参拝していました。堂内のスタッフも全員が素足でした。素足でいることに神聖さがあるのではないかと思います。しかしモスクの周りなり、堂内には寝そべっているインドネシア人もおり、同じイスラム教でも東端のインドネシアへ来ると戒律が緩やかなのかなと思ったりしました。



写真6 スマランのモスク

7. むすび

全般的に表面的にしか見ることができていないと思いますが、垣間見たインドネシアでした。お付き合いに テリマ カシ=有難うございました。

知人から紹介を受けた大槻重之氏著インドネシア専科を多いに参考にさせて頂きました。